

## 日本フランス語学会 秋の談話会 「前置詞と空間表現」

日時：平成 21 年 11 月 14 日（土） 14 時～17 時

会場：京大会館 102 室

京都市左京区吉田河原町 1 5 - 9 TEL(075)751-8311

パネリスト：

青木三郎（筑波大学）[司会]	「フランス語の前置詞 <i>dans</i> （中）の分析」
小熊和郎（西南学院大学）	「フランス語の前置詞 <i>en</i> をめぐって」
森芳樹（東京大学）	「前置詞 <i>dans</i> などの仏独対照：2 段階意味論の効用とさらに」
北原博雄（聖徳大学）	「日本語の空間表現の意味論・統語論—「に」句の分析—」

**趣旨** 日本フランス語学会では、毎年、春と秋に「談話会」を開催し、フランス語以外の言語研究者との研究交流を深めてきた。今回は、「前置詞と空間表現」をテーマにして、ドイツ語、日本語研究と比較対照を行う。このテーマを設定した発端は、小熊のフランス語の前置詞 *en* に関する考察、青木の *dans* に関する考察にあり、談話会でより広く「空間と前置詞」について知見を交換してみてもはどうかということになった。森はドイツ語で〈内部〉を表す近似現象を土台にして、ドイツ語の意味と構文の問題を論じ、北原は日本語の〈内部〉を表す形式（後置詞など）を中心に意味と構文についてロマンス語も視野にいれながら話題提供を行う。

**要旨**

**青木三郎**

フランス語の *dans* を出発点にして前置詞の意味と機能について考察をする。フランス語の前置詞は関係子であり、X と Y を関係づける。(X と Y の意味は多様であるが、Y は名詞句、X は動詞句である。) *dans* は Y の「有効範囲」を限定する。Y 自体の意味は、動詞句 X との関係で決まる。*jouer dans le jardin*（庭で遊ぶ）の *le jardin* は「遊び場所」であり、*boire du whisky dans un verre*（ウイスキーをグラスで飲む）は、対象 (*du whisky*) にとっては「位置」であり、主体にとっては「道具」である。このような「意味格」の決定は前置詞 (*dans*) ではなく、X と Y の意味的關係によって決定される。*dans* は *sous* (=under), *sur* (=on, above) とパラダイムを形成する。*dans* の特性は、Y に与える「有効範囲の限定」である。これは Y の意味に関わらず一定のスキーマで捉えることができる。*dans Y* は Y に〈境界〉を与える。フランス語の前置詞研究は主に <X-Y> の関係に重きを置いた統語・意味研究と、<Y> の限定に重きを置いた認知意味的研究がある。談話会当日は、日本語・ドイツ語との比較、フランス語の *en* と *dans* の比較を通じて、前置詞の意味と機能についてより理解が深められる機会になれば幸いである。

**小熊和郎**

ラテン語 *in* に出自する *en* は、16 世紀以降に副詞起源の *dans* と競合するようになり、その守備範囲は狭まり *en* の独自性への道を開いた。一方、「広がり」を表すとされる *dans* に対して「点」を表すとされる *a* の領域への *en* の侵出も現代フランス語には観察できる (*en lycée, en caisse*...)。

Guillaume の古典的な例と見解に従えば、*le livre qu' on jette dans le feu*（火の中に投げ込んだ本）は、間もなく *le livre en feu*（炎に包まれた本）となる。すなわち、「X *en* Y においては、外部にあつて含むもの (*contenant*) の Y [場所] が X の内部になり、含まれるもの (*contenu*) となる」。上記の例では、「火」は「本」の外に自立するのではなく、「本=火」の融合体を形成することになる。この見方は一般論としては有効であり、*en* の本質は「時・空間」限定というよりは、X の「性質」限定に関わると思われる。

*en* が「性質」限定の役割を担うとして、どのような種類の「性質」限定なのかに注目した Leeman (1995) や

Franckel-Lebaud (1991) らの研究は en の制約に関してなかなか考えさせるところがある。同じ感情表現なのに (1) en colère がよくて、\*en peur が排除されるのはなぜか？ (2) 同じ「海」にいるのに主語に制約があること、また一般的に「まった中 (plein)」という付加を与えると en Y との相性がよくなるのはなぜか (en plein désert 「砂漠のただ中」 / \*en désert, en plein jour 「白昼に」 / \*en jour)。仮説となる説明のキーワードは、上記 X-Y の「融合」成立の要件となる、「外在的变化 (結果) (Leeman) である。

(1) Paul est (se met) en colère. / \*Paul est (se met) en peur.

「ポールは怒っている (怒る) / ポールは怖がっている」

(2) Le marin (Le paquebot) est en mer / \* Les poissons sont en mer / (ok) Les poissons sont dans la mer.

「水夫 (定期船) は航海中だ / 魚は沖合にいる / 魚は海にいる」 cf. en pleine (haute) mer. 「沖合で」

他方、純粋な空間名詞とみなされる en France…も、内部分割ができない密 (コンパクト) な空間であること (cf. {dans /\* en} le sud de la France 「南フランスで」、{dans /\* en} la France du 19<sup>ème</sup> siècle 「19 世紀のフランスで」、時空間名詞に話者の評価を加え ce Y de … (qui, que, dont …) などとすれば en との親和性が高まる。通常は、(3a) の siècle (世紀) は à, (3b) の pays は dans を要求する。このことも en Y が外延よりも内包に重点を置いて X と関わっていくことがわかる。

(3a) En ce 20<sup>ème</sup> siècle de convulsion matérialiste… 「この物質主義的痙攣 (混乱) の 20 世紀にあつては…」

(3b) En ce pays dont l'histoire récente fut gommée, la jeunesse qui veut se démarquer, prend ses idéaux hors frontières… 「近年の歴史が隠蔽されたこの国では、一線を画したい若者たちは理想を国境の外に求める」

## 森芳樹

この発表では、青木 (2005) の認知言語学的考察を出発点に、前置詞に関する仏独対照を試みる。その際、(1) 前置詞を 2 項関係と捉え、(2) それとは別に認知的意味 (「世界知識」) を指定する Bierwisch, Wunderlich, Lang らの 2 段階意味論を出発点として、これを記述的なレベルで批判的に検討する。もしこの理論が正しければ前置詞句の解釈は (かなりの程度) 構成的に与えられるはずであり、(i) 内項に次元性 (詳しくは次元数) を与え、(ii) 外項を内項が準備した空間に定位するのは、操作子としての前置詞である。本発表ではまず、この考え方をもとに in (E; 'in', F; 'dans'), auf (E; 'on', F; 'sur) の対立などに焦点を当てながら、「内部」についての仏独 (英、日) 対照を試みる。

この理論で捉えきれない対照言語学的事実は言語間で多対一対応を示す場合であつて、対照される片方の言語で多義性が問題になる場合である。ただしこの多義性を前提に、個別言語における前置詞使用の特性を捉えることが可能となる。これに対して個別言語における前置詞の多義性は、次元の設定によって解決できる場合も多い (eg. in der Vase 'in the vase')。

対照を持ち込まなくとも理論の上で 2 段階意味論が支障をきたすのは、内項の次元性のうち次元 (もしくは空間) の意味内容が、外項との関係においてしか決まらない点である。上の次元の設定の問題も、この問題の一部である。もちろん、2 段階意味論はこの問題を認知的意味に属する問題だとして、構成的意味から排除する方向で解決を図ろうとする。これが受け入れられるかどうかは、会場での議論を待ちたい。

時間が許せば、移動について、このアプローチに基づきながら従来とは異なった提案も行いたい。

## 北原博雄

本発表は、句末が格助詞・後置詞の「に」で標示される句—「に」句と言う—で空間表現を表す例を考える。発表内容は以下の三点である。①は、本年 11 月刊行予定の『結果構文のタイポロジー』(小野尚之編、ひつじ書房)に書いた内容の一部である。

①限界性(velocity)への関与、(非)段階性((non-)gradability)から、「に」句は着点(goal)句と方向(direction)句に分かれる。着点句の場合は統語的には PlaceP であり、方向句の場合は PathP (か付加詞(adjunct)) である。

②「駅に入る」の「駅に」は着点句とは異なる。「着く」のとる着点「に」句と比べてみよう。

(1) 駅に {少し/5m} 入った(所で…)/ \*着いた(所で…)

これと似たことは英語の into でも観察されるようである。

③「東、北、北東」、「左、右」、「あちら、こっち」、「中、横、裏」、「上、下」に「に」が後接した句はどう考えればよいか？英語の *in*、フランス語の *dans* は、日本語では「中に」、「中へ」、「～における」などに対応する。英語の *at*、フランス語の *à* は「に」、「で」、「における」などに対応する。